砂畫品類

浩橋菴与篆

浪速書舗
文淵堂藏版

繪本手鑑序

百工並存而不容闕一矧於畫工乎夫以天地有文理人物有形象更不労筆墨而出於自然之妙矣竊考畫傳倭漢之豪傑游此藝者不暇枚挙余友法橋春卜聰達博贍専門畫圖邇應門生之需而編輯畫圖六篇題曰繪本手鑑宜乎其書昔時倭漢之名畫曁至於近世碌々之畫品又各於其所長遍無不拔萃群類嗟公之有功畫術可謂勤矣殺青已就為之請標掲一句於巻端余嘗游醫林而不知

繪事恐斉蚊蚋負山而雖似不當其任再三請不措於是揮毫對其編圖焉偉哉茲編也模寫諸家之名畫而通洽古今筆鋒活潑六法全備知非庸常之士所能及所謂妙畫通靈何讓顧愷之乎實所以可為畫道之軌

範者也後世業丹青者朝披夕覧而悟入其道自得奪唐宋之玅手矣

享保五年庚子仲春上澣日井原月溪掺觚於勢陽

一元斎

自序

先に呉興乃夏文彦士良歴代の名
畫者姓氏凡一千三百八十有余人
を撰て圖繪宝鑑と称せり
本朝にも亦此道に聞ゆる名
其数少からず近世皇都に
一陽斎居易本朝画史といへる
書を継て畫傳世に行るゝ是
然れども倭漢乃両書畫工の

家譜のことく其形象を記せし
間門人一安筆をとりて畫圖の備
らん事を請ふ予も亦辞すれとも
以後のく卒示として和漢の旧
蹟を撫し多く大幅なるものゝ成
肯に小軸ものゝ数十枚模写
し其需に應じていくたびも開刻
乃事の法式断然と分別あるものを
以後世に益あらんと丹青

六曰傳模移寫（てんもいしや）

是ハ上代よりのうつし置絵本をうけて違ぬやうにうつしうむへし絵の法にあらずといへども古人の絵本を見るやうに学べし

已上

和解　三病（さんべい）

一曰板（はん）

筆をとれどもたゞよはくして丸くすらに角もなく角あるところもかくり かくされのあるをたるむへしよくつと有し

二曰刻（こく）

筆をおそてきるにつまりのむしへ中らんをつふさうふめよりつれ筆あいとしを色しいささくきてもむるとかんをあり

三曰結（けつ）

筆中かんと挫りてもあらんぞうすらんとて挫りてもつまるをつかゆあくしていこそありいへいてさらるを師説でくしへ

已上

和解　八格

石老而潤（せきらうじてじゆん）

是ハ無別石をうけハ石の皮ハ古びて人の老たる如くみて老も潤ひありて出へしまろまで古たれハとてかきてるハかたし自からうるほひあるやうに出へし

水淡而明（すいたんじてめい）

水とかく時ハ手かるくちいさくなかれたかくまされうつまき又ハなみれのいきほひたよくとしわきらうにさかくかきなをてうすみにとまるべし

山要崔嵬（さんようさいくわい）

山とかく時ハたゞ山近く山ハ上からをかくきなとひのゝかたちもひろくたくけしくさところとをきやうにかくとのゆるべし

泉宜灑落（せんぎしやらく）

是ハいづみをかくにハきうくしてきいくと挫るといふもいさぎよく出へしとなり崖にくゞれてもなをそゝぎてうつあるべし

雲煙出沒（うんゑんしゆつぼつ）
是ハ雲またハけふりをかくにそのほか雲ハたて
よがりちかくけふりハそこしきへよりありの
みもゆうげんと山のこしとかくしちる法なり

野径迂回（やけいせんくわい）
是ハ野みち又ハあぜみちなどかくにかなりとく
道もかろくして遠近のかきわけ心ある
ことにかくなり其くあるハちかくみゆるとなり

松偃龍蛇（まつハふしてりやうだのごとし）
是ハ松をかくの法也いかにも松のおそもおれ
龍蛇のごとくみへるなくばならぬさうう
おもくいきほひをつけさることいふなり

竹藏風雨（たけハふうをかくす）
是ハ竹をかくの法なり風の吹雨のふるく
くらきと草の中にかくれて出ひし雨風
をわうしき出ハしらのすみやかなるをかく也

以上

畫品筆鋒初巻目録

漢畫

牧溪　そくに牛 湖の釈迦 八八鳥

米元章　つよそうびん ちやうさんゐる

王若水　もう女 香がしら としみ

揚補之　竹しやん 梅月

王摩詰　がたん 林和清

趙千里　仙人 きき

牧溪

僧牧渓

僧牧渓法常と号ス善く龍虎猿鶴芦鴈を画き山水樹石人物皆筆に随ひ點墨しくあそび古法にかなへり既墨観音の像ゑかきて名をゆるさる其牛馬花鳥世ニ比類なしとまふしに

雑玩かしこのしな

とのなりけり

Bei Genshō

米元章

米元章

米元章ハ天性書をよくし尤畫圖に
妙を得たり常に古賢の像を畫とのり
人物山水枯木松石の雲具筆墨に
奇ありて淡彩花草佳く是色暈
をなし形似を記事となして元章ハ自ら
墨を落して蒼氣生ずる所と
いへり繪緒ともに兼かして
布乃おかゆし

Gensho

元章

王若水

王淵字ハ若水澹軒と号せしけるとさ
よく丹青にくはしく趙乃文敏か
是を指教せし故画ぐことを皆
古人を師として一筆も戯を宗とせず山水
ハ郭熙を師として花鳥ハ黄筌を師として人物
は唐人をあつかふ一〻妙家を成さしむ
水墨花石におゐてハ
当代乃絶藝なりと云ふ

王若水

Ojjakusui

王若水

Ojjakusui

王若水寫

Yōhoshi.

楊補之

Hoshi

神之

王摩詰

王摩詰

王維字ハ摩詰開元の初年進士に擢で
官尚書右丞ニ至る善畫道をよくし
尤山水人物に長ぜり其傳なし天機や
かに思を畫圖にうつして自然と筆
を落せば趣成て物丹青をまで
時に詩篇の中に畫意ありと云る
ことば甚ことにあらはれて
是に比するものなし

Makitsu

摩詰

趙千里

趙伯駒字ハ千里善山水花禽竹石
又佛仙人物尤長ぜり清潤にして
纖麗を写し人物を写し即座
にあらはる其様ハいはれむ心筆先
そのあひ王冀流失ちぎりて見る人
奇なりとせし公是を
称し賞せしまで

趙千里

畫品筆鋒二巻目錄

漢盈

趙子昂　人馬（じんば）

蘇過　詩人

趙子固　竹　山水

劉耀　梧桐八から　まく

舜挙　らん鳥　桃ひと　泳小鳥　草葉

孫君澤　菊井詩　うさ紀

王元章　芦鷺　菊ととも

外国　婦人　こいぬ

趙千里

chōsugō

趙子昂

趙子昂

趙孟頫字ハ子昂 松雪道人と号ス呉興
に住す官翰林学士承旨にいたる
書法は古實なく天性不好に致る
もいとも人るとよしに極細にして
清彩長をそこに形似をよく
次画晋唐にのつとる具に神采
か入る丹青のこなしに手跡においても
又名をゆる妍婉多く絶妙なりし

Sugō or Shigō

子昂

蘇過

蘇過字ハ叔黨東坡先生が季子なり
恠石叢篠なとに咄々逼寫す山水
をゑかくに遠近の段ちかく岩よりて
竹木多し皆人迹絶たるところの景
墨をとりて是となれこと奇を出して
なりと友中山倅にいへり
詩をよくして自画
自讃乃物多し

Sokwa.

蘇過

蘇過

趙子固

趙子固

趙孟堅字ハ子固 畫圖を好て墨蘭
墨梅水仙花 竹石に長じ筆頭と
筆とゝ法にかゞつてとゝめず 淋漓の
彩畫 往々是をなし 畫をなして人
筆と筆ともわすれざるおしみて文庫に
納め置く見ぐに作所乃縁頭に[illegible]
満るとし 官朝散大史嚴州小あり
其他かんじてたるべし

子固

劉耀（りうよう）

劉耀字ハ耀卿（きやう）劉朴（かく）が子なり馬遠と
おなじく夏（か）珪（けい）を学ぶ筆力あつて雑（ざう）
畫（ぐわ）ハよくして墨色うつくしく父よりも出（あと）
藍（あい）といふべし山水人物花鳥水石神仙
とあつまりて中筆にのぼる所といへども
其とく紀りあさくして
なかし梅ぞの
おかし

Ryōyō

劉耀

舜挙

錢選字ハ舜挙 玉潭と号す人物
山水 花木 草蟲ともに趙昌を
師とし亦山水ハ趙子昂を師として
学ぶ尤折枝の画にすぐる物なり
みづから詩を賦し
其かたハらに書をとゞめて
[illegible]

劉耀

Shunkyo

舜挙

舜擧

舜挙

Son Kuntaku

Jyunkyo

孫君澤

孫君澤ハ杭人なり山水花鳥草花に長じ尤も長ず墨鬼鍾馗墨龍虎梅蘭木をよく画く馬遠夏珪を師とし晩年其法を変じて自一家の法をわかつに山頂に岩石多し又艸花ハ生動を書尽く細密なる猫蝶を蛛ふ一種乃風気あるとの事

舜挙

君澤

君澤

君澤

Ō Genshō

元章

王元章

王冕字ハ元章會稽乃人なりき詩歌
よくして丹青を工にし墨花人物
葡萄を画く。かのりうらう一家をなし
元畫を好みに必詩を甚う人に見せて
元章がおぼえし

當時比もなき者なりて
絶妙の一手なり
いつしるら

王元章

外国

外国

外国に畫あまた其姓氏見えたれど畫行
宋元に類せずして閻次平 [illegible] 呂紀に
は來流にて列に無き風氣あり渡彩
乃とのなし今あるにおいて
世俗に唐繪と称して
あれしくときれり

Gyaikoku

畫品筆鋒三巻目録

倭畫

兆殿主　てつかい仙人　十六らかん　もんじゆ

鳥羽僧正　鳥獣

土佐家　巻もの　源氏　花ゆさん

一休　芦かに　白牛極

周文　漁童　山水　かくらく圖　部にうき

宗丹　山水　楼閣

雪舟　やうりう　山水　達磨　わしん

外國

明兆筆

兆殿主

明兆法号ハ吉山淡路の生也東福寺大道の弟子にして東福寺の塔頭南明院に住す其画法宋乃李龍眠元の顔輝が筆力を得て物仏像においてハ本朝の長となし山水花鳥に活く雲の樹石諸の形をかきわかち　東福寺に画く釈迦涅槃像并五百羅漢十六らかん同十八祖像寶山檀画聖一国師の像左右にかけてあり達磨の像白衣観音等余いつもあり

画本手鑑 巻三

鳥羽僧正

鳥羽の僧正覚猷ハ源隆国の子にして天台座主大僧正に任じ鳥羽に居住して鳥羽僧正と称す寺和画をよくしてことに嗚滸の絵を作て己が心をあらはさむ筆力筆にまかせて其名高かりし

其心彼をあてかへらとどめに先古清水よりて仏画の名なりし

画本手鑑 巻三

Tobano Sōshō Kakuyū

鳥羽僧正覺猷筆 印不見

圖寫所者
京東寺什物

土佐

土佐刑部大輔藤原光信ハ絵所の預
やまとあるる倭畫をとうとし殊に奥方ゆきて
あそひ或ハ連哥絵巻紙のたくひとりて是
ち秘絵巻長ともへし其筆法細密にて
志かも筆力あまれりあかれハ彩画とあれ
墨絵ともに細筆なり経緯を見へ稍
として光信ハ文代あまし光信世俗ふよく
志きるにめて古に志るを

繪所土佐邢部太輔　光信筆

上代土佐之比者
朱印ヲ不用

一休

一休和尚諱ハ宗純　後小松帝の皇子なり　大徳寺に住す　其操行世に倫せに毎ニ書画をよくして　其筆の跡ハ山水人物花鳥皆草卉として其筆意を雅潤法を加ふるものハ当世茶人尊重して賞翫ありとくに墨画ところ道徳のよけいハし世ニ得難し

一休

Shūbun

Ikkyu Sōjun

周文

周文ハ相国寺に居て画ことに妙の墨画
牧渓玉澗をまなふ彩画ハ馬遠夏珪顔
輝よりも奥義をきはむ人物山水花鳥ともに
御画となされ日本の妙手なりとて世に
雪舟宗丹狩野皆周文をまなふて名
筆とよばれ位をもらふ越渓周文ともい
ハ江州山上越渓に庵をむすびけり
依て是を称せし也

一休宗純

Shūbun

周文

Shūbun

周文

越溪周文

Shubun

周文

Shubun

周文

小栗宗丹

小栗宗丹

宗丹ハ相国寺にて剃髪して僧となる
庵をすゝ称て画法牧渓玉澗夏圭か流
を志す人物花鳥山水は長して中かも
山水ハ雪舟周文よりも尚うるはしきをも
牧渓を志して後かより自牧とも称して特に
祐勢は宗丹を師として宗丹ハ周文を師と
まそ是本より漢画の風気を法し一家の法を
たてるとのありしやくとて

Ōguri Sōtan

小栗宗丹

畫本手鑑 巻三

雪舟筆

雪舟

雪舟諱ハ等楊 備渓斎と号して備中
赤浜の人なり 始めハ周文を師として
壮年の比大明に入て師とすべき名画を
尋ぬ明に李氏張氏と云二人世に高名の
画者ありと云然ども李氏が画を見て我遠く師
とはなしに我といへども師とすべき人なしと
帰朝して周防の国山口雲谷寺に住して
久しく雲谷軒と号して

行年八十二歳雪舟

雪舟筆

Sesshu.

畫品筆鋒四巻目録

倭畫

古法眼　七賢人　花鳥　畫扇　僧正坊

永徳　山水　秋のし　西王母　きよみい

秋月　山水　雲龍　隔るる　せいきい

周耕　出山釋迦　文殊

啓書記　かそい　大黒てん

相阿弥　萩廉　むしやん　山水

雪村　たんろう　こらう　浅ちわ

道安　大根　ありその　鯉鮒　六祖

古法眼

狩野四郎二郎元信ハ友清が子也 趙千里にまなん
ぜし也 彩發して永仙と号す 甚多く法文字
古来より先狩野氏之祖なり 山水ハ馬遠夏珪
牧渓玉澗舜挙 人物ハ則梁楷顔輝が流
花鳥ハ趙昌馬遠舜挙 像畫ハ信實光信
が法によれる 明国勤城鄭澤と云者元信が畫跡
を見て寿ありとし 書を送て曰 東ハ元信が門人
也とかりんと然ハ古歌のこなりて墨画其名高し

Ko Hōgan Motonobu

法眼元信

Motonobu

元信筆

元信

畫本手鑑 巻四

髪髭白
面濃朱
衣淡朱

朱

白

アカキ

古法眼筆僧正坊図評

右に画所ハ山中の魔鬼僧正乃像也或日元信此
を人まて天狗乃形を図せんことを乞ひ元信いまた
天狗といふもの世ふ図像なし世人とかくと思ひて具
顔を井に老翁まて天狗あらはれて思ひを元信
覚ちんしあらもとしつく是成写を真録の紙上に
像を明て此家に置る家よろしくおきて鞍馬寺
にをさめんとて翌日寺に往て其ところに此図
天井とやふり高く鞍馬るに元信けふしと云
家あかり奇なるとしてきて夜来役行者右に年号
安像と彌筆すゝく是を其元信ふかひて妙
なり事多し今しもおくにあるさもし

啓書記

僧禅啓ハ建長寺にありて書記となる仍て
啓書記と称す又雪渓と号ス其画法瀆
彩ハ周文に学ふ水墨画ハ牧渓を学ぶ故
山水人物鳥獣花木佛仙にいたるまで奥意を
きはめたるを以て別号を
賓楽齋と名づく写す所
周文をまなびて画ハ
周文にまさりし

啓書記

祥啓

永徳

狩野永徳ハ名ハ源四郎元信が孫なり畫
法ハ元信が業を継に志ふかく志ことを専らとしけれ
金殿多くして細畫をなすに暇なし故に大畫
となれり其頃秀吉公永徳におほせて大坂城の
金殿を画がゝしむ數十丈の松或ハ人物なんどつぶさに
人物山水ハ草筆をもつて草略として一風有
ある中世の名筆なり天正十八年の秋
汜十八才にて志くおりぬ

畫本手鑑 巻四

永徳

Yeitoku

yeitoku

永徳

桐阿弥

真桐文相阿弥と称す 松雪斎と号す 東山
殿の同朋にて茶道をよくして画は山水人物
花鳥法を極遠にして其伝図もよく
出る牧溪の流を画きて是古今書画の宝
名とてまたさらに遠きその所 桐阿弥の筆
名じるゑ世に多し
かゝるも是を御覧せし

Shinshō

Shinshō.

秋月

僧等觀ハ秋月と号し姓ハ高城氏にして
世々武士なりしを剃髪して僧となり雪舟に
従ひ明朝にわたりて畫法を學ぶ人物山水
は雪舟にかはらずといへども筆末石の法洞なる
事世に志あるとき全像盃をもんで自強と
漢畫の法なり
せかし明朝のあそ字

真相筆

Tōkwan

雪村

僧雪村諱ハ周継と号して常州乃産也又ハ武にありしが剃髪して僧となり天性畫を好んで雪舟が風采を学ふ山水人物花鳥に長じ俵畫とあさに筆ありといへどもいさゝか雪舟に似ず物遠ありて舟が明俵かわらぬ只畫跡ものとくまゝにふれの苫と云ふにふとふごけうらく文字の連也のみし

Shugetsu

秋月筆

Sesson

雪村

畫本手鑑巻四

Kei Sesson

Shūkei

継雪村畫之

周耕

僧周耕ハ大和多武峯に住す墨画をよくす其伝雪舟より出ず人物花鳥仏他雑雪舟に似たり山水をよくす名手達人いましう己が意とかしく墓めのもくしその形り中華に入て舟と周しうあそ俊

周耕

扶桑周耕

Shūkō.

山田道安

山田民部判監して道安と称して和州春日
やまに住せし筒井一族にして世々民門あると
性素画図を好んで周文雪舟を学ぶその
筆法細密にして周文のごとしさらに新意を
加へて世に名を得る用所の紙扇紙は
まれなり多くは大幅達磨の大幅をよくす
希なりし写生にあらず
先生を分ちてゆるとそう

Yamada Dōan

山田道安筆

Yamada

1

Yamada Dōan

山田道安

Utanosuke

雅樂助

雅樂助（うたのすけ）

狩野雅樂助ハ祐勢（ゆうせい）が仲子（ちうし）なり山水人物花鳥
をよくす又細畫繪卷（さいくゑのゑまき）木貝にて筆法（そうほふ）古風を
学べり元信に似たる所あれハ世に元信（もとのぶ）が畫（ゑ）
なりともいふ　天心（てんしん）を崇（そむ）んで氣韻（きいん）ふかく温潤（うんじゅん）なるも
當家（あとまさ）ハ父祐勢（ゆうせい）が筆力（ひつりき）も勝（まさ）り
たくハ父子（ふし）兄弟（けいてい）おもかげの
おなし所があるべし

Yūshō.

友松

友松偉ハ紹益海北氏なり江州の生也人と云
狩野永徳を師として畫を業とし筆法人物
花鳥山水等の末よく師の流を継といへども
其筆法を改め一風をなし甚軽妙にして洒
落なり寛丹が書その法爲しといへども尚
古人の規矩を守らず其子友雪も
己がぞん独のことさだし

等伯

長谷川等伯

長谷川等伯ハ信春と云ふ世て濤陽ゟ
しが其性画図を好みて狩野が
傍して画法を學びても後一家のまう
と越して都に鳴る和朱論あるにいまも
たに安乃中古法樂之筆勢の君を顧て
がきたる宮にのそ尚後篇に載
もあり　雪舟か代等伯筆と記せる
雪舟に續ハ我ちかや本かんがみにて

Hasegawa

長谷川

瀧本坊

男山瀧本坊式部卿松花堂と号す又惺々翁と称す毎に書画をこのみ行成の古風を学び又は新意をかり一流をたてゝ筆力清円にして物濃淡に墨を用ふ事極色のものゝみならず淡彩のものあれば飄逸紙上を猶のこす寛永十六年九月十八日歿す年十六にして卒す

Unkoku Shutoku

雲谷周徳

僧周徳ハ惟馨と号して雪舟を師とせる
其画ハ元より山水人物花鳥ともに師伝
をうしなはず牧溪玉澗が筆骨に志ざし
無極ハ法をうけし雪舟が跡を嗣て雲谷
菴主となりて相續し等顔等益に具
家風をつぎて世にしらるゝ高名のあるとその
よろしかりしぞ

Shutoku

周徳

周徳

山楽修理亮

狩野光頼山楽と号す近江国人也本姓
木村氏羽柴筑前守に仕へて近侍たり或
日公の庭に桃の枝落てありしを見て床上
に馬の形を画く公見て奇なりとしかハ後に
丹青に心をよせよと狩野永徳にあつけらる
ありし画中にして功を以て霊
家蔵を壊る所に画跡多し中にも東福寺
天井蟠龍并建仁寺大方の絵傳比叡山

Sanraku Mitsuyori

山樂光頼

宮内卿法印探幽

狩野守信ハ永徳が孫孝信が長子也御年十六
と称し剃髪して探幽と号し後所を領し
南殿賢聖障子の図を画く自から丹青におゐて
家風の表より新意を取て雪舟が筆力をま
しゆへ画道中世に動きて皆彼が風を専に
ひ古実を失ふ者もあへし守信におゐては天
性の奇を者し法眼より
法印に叙す

山樂筆

Tanyu

探幽筆

狩野

Tanyū

探幽斎筆

守信

Hōgan Tanyū

法眼探幽

永真

狩野安信永真と称して孝信が二男之全兒探
幽より上ならし又父が筆格おくはしく古風に
海北法眼が彩色を学んで紺紅残緑を存し
又前洲より伝雪舟が画にかぎらるゝを得
今ひくかたきにしとれて永真が画を知る
の像を画家に知して即時法を又其後妻具
残しもて擾く
知るれ其像法を延

Karino

狩野

Yasunobu

安信筆

Hōgan Yeishin

法眼永真

尚信筆

尚信

狩野主馬尚信自適斎と称す守信が弟孝信が三男也金襴のごとく筆法を出すにたくみなり父に其息をあらはし世に墨絵人物山水花鳥草木水石おもむきよく書なりにいたるまで浅彩極めてよくせり又志すも己が意を以て雲をなせりといへども父が法をうしなはずまことに孝信がかいて知ることあり

女雪信

狩野雪信ハ探幽が姪なりと聞なるとそ候なるに筆勢守信にかはらず似さる守信が名の功とたゝえけしとなり扨不日掛て帰舞の図となるに又女筆にハ寺なる物もしらト文に添京氏女雪信の字ありまことに沈吟あるそのかず

狩野主馬

Sesshin

雪信筆

清原女

Daughter of Kiyowara Sesshin

清原氏女雪信筆

清原

常信

狩野常信養朴と称し又耕寛斎とも云
父探幽守信の名高き筆意をも好みて
紙上にあらはれ其濃淡深浅遠近世の俤
飛ぶが如し大画細画ともに
多能にして神妙なり
世まれなる画家にして
世にのこせど

常信筆
狩野

Tsunenobu

Tsunenobu

常信筆

常信

補遺序

偉哉畫道の徳上王侯大人下士庶に至る迄是を賞玩あらずといふ事なし事々物々古今其形を具にするを以て其時の清趣を兼得て其物の天性の自然を表す所謂古の畫ハ遠簡にして意淡也中世ハ細密にして精微なり近代ハ燦爛にして只々備を求む当代ハ錯乱にして皆筋を失ふといへとも一向に昔ハ精微今ハ錯乱と分つべきにもあらで上古にも名あるハ近世にも間又能畫あり或ハ明経ありて名あるもあり不奇にして絶妙なるあり或ハ古風の奥義を極て時の氣に合ざるもあり

狩野

此事畫道に限るべからず所謂千里の馬ハ
常にあれど伯楽ハ常にあらずと法眼もいはれしも
古畫なきハ是を袖ふし當世の人の畫ハ能なきを
そしりえを擇る事誤れるの甚しきにあらずや後
の今をとんる事亦相今の筒をとりんるがごとく偏人
の日我志を畫骨にのそむしもそ當代流布もさん
雜畫を模写しなせる有を是を補遺して好事
者の為よせんやとこれ假名として以て既に小巻末
に附し畢 元来不才にして當時の事實
だにも不詳 況や往古の事とや其詳ならざるは
識者校合を加へ再擇に彫せんことをあつと

畫品筆鋒六巻補遺目録

正甫　うはら

直菴　たう

宗達　きく　あざみ

友禅　けいせい　秋の野　とみちよ　そなまま

光琳　きさや　ひやく　けいし　たんぽぽ　ちどり

鳥羽僧　なくしん

立甫　たうく　二高人　まそかる

以上

鶉

実に逍遥の甫と云ものゝ常に籠をおく
ところに山家の風流なる一つの性とたのしみて
いふ籠とひざのもとにし能鳴とあはれ
かなしき鶉の居るをゆるしく声清し
とかくこれまさに
生得とぞ見るべきなし

鷹

直庵と云人ありて姓氏を志らさりし又は
曽我の直庵とも云し 蛇足が族紹斎師
なりとも云 其画は筆を尽くさとされハ水墨
の流なりし 又人物などをかきしハ彩色なるを
其性質となしたる事におはしける
かくてや下乃毛をしとも
ようこ おかくしとおる

草花

宋趙昌は性情之入は京の様人多くと
山樂が細画に倣ふ花草をよく写す
元にはげ余は華元に次ぐ春秋の菜
草難悲ぐくに今朝をなくはづまて
きいまして一風をなす
世俗とよくこなし

春卜書

衣服の模様

衣様ハ古将氏より草(つまびらかに)衣服ハ錦由書紙
乃絵織る乃彭(こ)鄙(ひ)遠(ゑん)境(こきやう)の大様(もやう)を
いひあつめて布上ゟ漢(かん)流(りう)の絵(ゑ)具(ぐ)
を施(ほどこ)して浮(さい)流しめつゝにもこしを
見て描(ぐ)き花(おう)象しるし
畫(ぐわ)據(きよ)の中に入る意と
はかるべき

鳥羽絵

そも此ようを鳥羽絵と名付け狂画と号
みだりある古人の僻意によることの畜獣
禽鳥ハ風流ありてたゞ人物の意へ
形あるを手足の延長も少眼苦口人物
とのさき風流とならん趣有要の
たとへ秋の夜のともとなるべきもの
見あん思ひ笑ふ

名家の趣畫

立圃世にしる画道書画ともにすくれまや
かにして俳諧あり画ていふこと一句一そ
とく軽妙のよけいに草画とそのほ
筆もひでたるが維が筆跡師募
ともみゑ給ども
俳聞にしるす
呉竹小のか

節分乃まめも
打出の小槌から

立圃書

跋

孔子曰知之者不如好之者好之者不如樂之者於伎藝亦爾矣粤島嵜卜午自髫齔耽畫術入狩埜氏之門屢趨于庭審問篤信乾乾不倦也其為人也宏才敏捷而拔群出黨也研精探微頗雖得其理而持謙遜敢不傲其能爲所謂於樂之者豈不美哉終高聲浪颺響達恭拜謁峩山法親王所擢匠之一至若見授法橋位亦非幸乎間所蒐輯之鈔畫品類六篇袖來示予且乞之跋予淺陋復何言乎特詳論盡乎序文然

信友之言不恐默置乃賀其書成功不憚贅及謾置數字於卷後噫春卜子纒先人之遺編粮佳名於千載俟後来諸同志奥起可謂傚傑之士矣

享保庚子季夏下絃日攝坂醫生竹田静専記